
携帯電話の悲劇

獅子唐 愛糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

携帯電話の悲劇

【Nコード】

N9417N

【作者名】

獅子唐 愛糸

【あらすじ】

短編です。

淡い恋心がテーマです。

Re:1

ぷるるるる…

世界を彩る
音と光。

話し声
車のエンジン音
笑い声
街頭テレビ
怒鳴り声
信号機

着信音。

りりりりん
着信です着信です
ユーガッタメール
とうるるるるる

何だかよくわからないはやりの音楽。

様々な音を奏でる箱。
思いを電波に乗せ通信する

携帯電話。

黒い制服をまとう

今時珍しいくらい長く真っ直ぐな髪を
風に任せるように下ろした彼女。

彼女だって

彼女に想いを密かに寄せる僕だって
その世界を彩る音の発信源一つである携帯電話を所有している。

ひっそりと…

ポケットに忍ばせるようにして。

僕の携帯電話は

キノコマークの白い形。

周りの男子には女っぽいと
言われるがなかなか気に入っている。

彼女の携帯電話は
確か黒い色をしていた。

彼女らしい、なんの
飾りもない形。

休日の昼下がり。

僕は時間を持て余し、近くに通った
ファーストフード店にいた。

てきとうなものを注目し

シヨウウィンドウの席に着き

ただ漠然と無機質な東京の街を見ていた。

彼女を見たのはその時だ。

高層ビルの下、交差点に入ろうとした彼女。

…が、携帯電話への着信に

足を止められているところを目撃したのだ。

休日だというのに
黒い制服を着た彼女は悠然としていた。

だから僕は無数の人混みの中から彼女を見つけられたのだ。

(…あ、渡らない…?…ああ、電話か…)

ふうん…
意外であった。

所有しているのだから勿論
使用するであろうが
なんと…

彼女がああ箱型を耳に当てている姿など
想像できなかった。

(?……出ないのか…?…あ、怖い顔…嫌いな奴からなのかな…)

いつの間にか僕は、食事に手も着けず
彼女の行動に魅入っていた。

ただ単に

電話をするというだけの行為なのに。

Re:1 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

今回の短編のテーマは

「携帯電話」と「恋心」です。

女子高生の私にとって

携帯電話は石のたからものみたいなものです。

あの頃は大切に大切に

磨きながら保管していた石達も

今ではただの石です。

あの頃はあんなに興奮したのに。

きつと携帯電話も

同じです。

今の私は

確かにこの機械を道標に生活しています。

しかしこの機械が

あの石達とおなじように

ただの機械に思っ様になる頃、私が今の時代に感じている
甘く幼い恋心をどう思っ様になるのだろう。

そんなことを思いながら書いた小説です。

Re:2

結局彼女はその黒い携帯電話を
耳に押し当てた。

その姿はまるで
犯人を恨みながら銃口を己の頭に
宛てているようだった。

しかし、勿論それは
銃口なわけもなく。

ただの携帯電話である。

スクランブル交差点の信号は
規則正しく色を変え
道ゆく人々は
横断歩道の入り口で立ち止まる彼女を
置いて何を急いでいるのか
歩いてゆく。

「何を話しているんだろう。」

誰と。

何故。

あの美しい顔を歪めさせる人物。

いつだって眉一つ動かさず彼女は生きている。

電話口の先の相手に興味が沸いてくる。

（あ、）

引きはがすように

耳から携帯電話を離れた彼女は

そのままその黒い物体を

ガタンッ

（なっ…！）

投げた。

思わず立ち上がってしまった

その僕の動向が
視界の端にでも入ってしまったのか
彼女が視線をこちらにやった。

全てがスローモーション。

彼女の白い五指から
空に向け放たれた
黒い携帯電話は無機質にも重力に反して
上空に登ってゆき

そしてまた物質界の理に従い
落下してくる

ゆっくりと。

登って、今まさに落ちてくる機械など
見向きもせず
長い髪をしならせふわっと
此方に顔を向け始める彼女。

しまったと思う頃には

遅く

動き続ける人混みとシヨウウィンドウを

隔てたあつちと

こっちで

僕と

彼女は

目があった

ゆったりと。

Re:3 (完)

見開いた目、が
僕の瞳を捕らえる。

数分の間。
相も変わらず人は生き急ぐように
歩いてゆく。

彼女は

ひらりと踵を返し
何事もなかったかのように
横断歩道を渡っていった。

僕ももう彼女を追いかけることは
しなかった。

完全に黒姿が僕の視界から

消えたころ
僕は席につきなおした。

放置していたハンバーガーに
手をつけ始める。

と、その時

僕の右ポケットの中で
例の機械が振動した。

振動の仕方から
メールである。

それならば
このハンバーガーを片付ける方が
先決であろう。

無視をすることにする。

こうして僕らの
一瞬と一瞬が重なり合ったような
瞬間は終わり
僕は僕の
彼女は彼女の

いつもどおりの
休日に戻ることとなった。

投げ捨てられた
黒い携帯電話を歩道の始まりに残して。

e n d .

Re:3 (完) (後書き)

終わりました。

一話完結のつもりが

何故か三話までだらだらと…

でももう終わりです笑

さてそろそろ

「君のとこまで」を書いてかないと
いけないですね。

獅子唐は面倒臭がりでいけません。

しかし、黒き少女。

彼女のようにいつそ清々しく
携帯電話を放り投げられたら、と
日々常々思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9417n/>

携帯電話の悲劇

2010年10月13日00時38分発行